

ビブリオバトルによる域学連携の試み

An Attempt of a Community and Academia Collaboration by Bibliobattle

高井 亨

TAKAI Toru

要旨：大学と地域との連携（域学連携）が求められる中で、ビブリオバトルを地域の中で実践したことにより得られた3つの効果について検討をおこなった。その結果、(1)「地域における大学の知的資源供給者としての役割」は十分に達成されていた。(2)「ビブリオバトルによって得られた学修上の効果（学生自身の学修効果）」はおおむね得られていた。(3)「ビブリオバトルが地域の中でおこなわれることの効果」はやや得られていた。これらのことから、ビブリオバトルを地域で実践することは意義があると考えられる。

【キーワード】 ビブリオバトル、域学連携、知的資源、鳥取市

Abstract : Cooperation with university and local community has been required recently. In this paper, three effects obtained from the practice of Bibliobattle by Tottori University of Environmental Studies in the local community of Tottori-City were verified. As the results of this study, (1) the role of the university as intellectual resources supplier in the local community were achieved fully. (2) The learning effects for the students through Bibliobattle have been found, on the whole. (3) The effects of Bibliobattle that was held in the local community were found slightly. From these results, it is considered that the practice of Bibliobattle by the University in the local community is fruitful.

【Keywords】 Bibliobattle, Community and Academia Collaboration, Intellectual Resource, City of Tottori

1. はじめに

1-1 域学連携とビブリオバトル

大学と地域との連携、すなわち「域学連携」を推進することが大学に求められている。域学連携とは、総務省(2012)によると「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動」をいう。

このような活動の意義として、総務省(2012)では「様々な課題を抱えている地域に若い人材が入り、住民とともに地域の課題解決や地域おこし活動を実施することで、

地域で活躍する人材の育成が可能となることや、地域に『気づき』を促すこと」を挙げている。

域学連携の取り組みは、全国各地の大学においておこなわれており、筆者の所属する地方公立大学である鳥取環境大学においても、このような取組がまさに求められている。実際に、本学では、たとえば授業の一環として商店街と学生とが手を組んで、鳥取市中心市街地活性化イベントを実施しており、地域活性化に貢献している¹⁾。また鳥取大学においても学生・教職員が鳥取市中心市街地活性化のための取り組みを、街中におけるアート・プロジェクトを通じて行っている²⁾。これらはいずれも、

1) たとえば2013年7月27日に催された「太平線・環境大学タッグナイト」が挙げられる。

2) たとえば2012年から実施されている鳥取市の旧横田医院を利用したホスピテイル・プロジェクトなどがある。

大学が地域へと活動の場を広げ、地域と共同でイベントを実施するというスタイルを取っている。

域学連携を支える背景のひとつは、大学のもつ知的資源を地域内で有効に活用しようという姿勢であろう。大学の知的資源の供給は研究活動に従事する教員によっておおよそなされている。それらは研究、授業、公開講座、地域貢献活動等である。他方、学生も個々人の持つ力に応じて知的資源を供給することは可能である。特に、学部3、4年生や大学院生ともなれば、専門的な学習も進んでいる。地域への関心が深い学生においては、彼（彼女）らの問題意識の深まりとともに、それは可能となるだろう。しかし専門課程へ進んでおらず、特別なスキルや地域への関心をもたない低年次生においては、それは難しいかもしれない。しかし、低年次生も大学の構成員であり、彼らにも知的資源の供給の一翼を担ってもらうことは意義がある。また、低年次生のうちにそのような経験を積んでおくことは、3、4年生へと学年が進んだ際、本格的な域学連携への取り組みに参加するときの障壁を低めることも期待される。

そこで、筆者は低年次教育において、学生が地域内で知的資源の供給を果たすことが可能となるような取組を模索していた。その際、学生に学修上の意味合いをできるかぎり多く持たせることが重要であると考えている。しかし、既存の域学連携においては、その趣旨から「地域の問題解決」や「地域おこし」というきわめて実際的な課題に対して注力されがちであるため、特に低年次生の教育にこれを導入することは、かならずしも望ましいものではないかもしれない。すなわち、低年次生においては、広範な学術的教養を深めることが重要であり、今後の学修に資する基礎的リテラシーを身につけることが望まれるためである。実学的な視点からの学修は、3、4年次や大学院に進んでからの域学連携の取り組みの中で目標としても遅くはないだろう。

そこで、学生、とくに低年次生の学修の達成と、地域への知的資源の供給を両立させることができる取り組みとして「ビブリオバトル」を導入することとした。

ビブリオバトルとは立命館大学の谷口忠大准教授が日本学術振興会特別研究員であった2007年に考案した書評ゲームであり「知的書評合戦」とも呼ばれている。「人を通して本を知る、本を通して人を知る」がキャッチフレーズであり、谷口（2013）によれば、職場、学校、地域等様々な場におけるコミュニケーションツールとして有用である。

ビブリオバトルのルールは以下に示すとおりきわめて単純である。

- ① 発表参加者が読んで面白かった本を持ち寄る。
- ② 順番に一人5分間で本を紹介する。
- ③ 各発表の後に参加者全員でその発表に関する質疑を2、3分行う。
- ④ 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を行い、最多票を集めたものを「チャンプ本」とする。

以上から明らかなおおりに、ビブリオバトルは特別なスキルをもたずとも、だれもが、参加できるイベントである。

ビブリオバトルのもつ機能としては、谷口ら（2010）によると次の5つが挙げられている。「書籍情報共有機能」「プレゼンテーション能力開発機能」「良書検索機能」「コンテンツ生成支援機能」「インフォーマルコミュニケーション支援機能」である。このうち「書籍情報共有機能」「良書検索機能」が知的資源の供給という役割に相当する。つまり、これらの機能により、ビブリオバトルは、だれもが本を紹介することとおして知的資源の供給者となりうるのである。そして、それが大学の外でおこなわれたとき、地域において学生が知的資源を供給することで、受け手となる住民との間に交流が生まれ、大学は地域の活性化に一役買うことができる。

そこで、われわれはこのような目的のもと、鳥取市中心市街地にてビブリオバトルを開催した。その際、いきなり中心市街地で実施することは学生への負担も大きいため、大学内にて試行的に2回実施した。一連のビブリオバトルがどのように行われたのかは、2-1節に詳述する。

1-2 本稿の目的

以下では、地域（鳥取市中心市街地）の中でビブリオバトルを実施することによって、「学生による地域への知的資源の供給」と「学修」という2つの効果が、どの程度達成されたのかを検証する。これに加え、両者が交差することで生じるあらたな効果についても検証をおこなう。すなわち以下3点の効果について本稿では検証する。

- (1) 地域の中で、大学の知的資源供給者としての役割がどの程度果たされたか（地域に与える効果）
- (2) ビブリオバトルによって得られた学修上の効果（学生自身の学修効果）
- (3) ビブリオバトルが地域の中でおこなわれることの効果（地域と学修とが交差した結果生まれた効果）

以上について、次の方法で検証する。

(1)の供給者としての役割は、「大学の知的資源」に対する地域からの需要を満たしているかどうかによって評価することが可能である。そこで具体的には、

①地域からの来場者数

②来場者にとってイベントが楽しめるものだったか
(また参加したいと思える、つまり再来場の意向を生じさせるものだったか)

③ビブリオバトルで得られた知識は「新規」なものだったか、つまり、既知ではない本が紹介されたかといった点を質問紙調査等から明らかにする。また「ビブリオバトル」自体、認知度が低いと考えられるため、このようなイベントを開催したことそのものの効果も知的資源供給者としての役割を果たすものであると考えられる。そこで、

④ビブリオバトルの認知度をどれだけ高められたかも評価項目として加える。

(2)については、ビブリオバトルを実施したことによる学生の能力向上によって評価することができるが、それ自体は評価が難しい。そこで代替的に、

①学生の読書量の変化

②プレゼンテーション技能の変化

③紹介書籍の多様化

を取り上げたい。「読書量の変化」は読書自体がさまざまな能力の向上に資すると一般的に考えられていることから妥当な指標であろう。また、「プレゼンテーション技能」はビジネスにおける重要な技能と見なされており、その向上を教育目的とすることは昨今の教育現場では重視されていると思われる。それゆえ評価項目として導入した。「紹介書籍の多様化」については、どのような本を読むことが学生にとって良いとは一概に判断できないものの、教員の立場とすれば、学生の学力向上のためには多様な読書経験を積んで欲しいと考える。そこで、ビブリオバトルを実施することで、紹介書籍の多様性が生じたかどうかを評価する。

以上について、授業時に学生に課したレポート、授業の観察結果および質問紙調査の自由記述欄の分析を通して明らかにする。

(3)については、ビブリオバトルが地域で行われること

の効果であり、学外という場とビブリオバトルとが交差することによる相乗効果と捉えられる。この効果としては

①学生の意欲の変化

が想定される。学生が地域で活動することは、学内だけではなく、学外からの評価にさらされることに他ならない。これは、学生の意欲に対してプラスにもマイナスにも作用しうる。つまり、外向的な学生にとって学外でビブリオバトルを行うことは、自らをアピールする絶好のチャンスとなろう。しかし内向的な学生にとっては、それは「はずかしい」ことで、意欲を減退させることにもなりかねない。「学生の意欲の変化」は、教員による学生への聞き取りによって評価をおこなう。

また、ビブリオバトルと地域とが交差することの、もう一つの効果として

②「チャンプ本」の選ばれ方の変化

を取り上げる。つまり投票者が地域住民へと拡大されたことによって生じた、投票結果の変化であり、これは実質的に生じた大きな変化であるといえる。地域住民の率直な評価がここに反映されるのである。この点については、実際の投票結果を確認することでおこなう。

さて、以上に示した諸効果について、ビブリオバトルを対象として研究された例は存在していない。ビブリオバトルの歴史が浅いため、これを対象とした研究自体の蓄積が少ないこともあるだろう³⁾。また、上記の(1)から(3)がビブリオバトルの効果であることを明示した研究も存在していないと思われる。

とくに、(1)や(3)の効果が実証的に明らかになれば、大学が主催するビブリオバトルを地域でおこなうことの意義がより明確になるだろう。

2. 方法と使用データ

学生の授業レポートの分析および、ビブリオバトルにおいて学生・市民に対して実施した質問紙調査から、1-2節に示した効果が達成されたのかを検証する。

2-1節では、鳥取環境大学におけるビブリオバトルの開催概要および結果を示す。学生がどのような学修過程を踏んできたのか、またこれまでに実施したビブリオバトルの結果が明らかになる。2-2節では学生レポートの概要を、2-3節では質問紙調査の概要を示す。

3) ビブリオバトルに関連する論文は、ビブリオバトルを設計した谷口忠大による情報科学・コミュニケーション分野の論文が圧倒的に多い。たとえば谷口ら(2010)、谷口・須藤(2011)、谷口(2012)がある。また、教育学分野ではビブリオバトルを用いた教育効果について心理学的視点(メタ認知)から論じた高木ら(2012)、多文化リテラシー教育においてビブリオバトルを導入した実践報告として嶺崎(2012)が存在するが、本稿で議論する内容を網羅的に報告した例はない。

2-1 ビブリオバトルの実施概要

本ビブリオバトルは、鳥取環境大学の1、2年生対象の必修授業であるプロジェクト研究1・3において「ビブリオバトル in 鳥取」と銘打って行われた。授業の参加者は1年生7名、2年生6名の計13名であった。

先述したとおり、ビブリオバトルは学内で2回（ビブリオバトル@環境大）、学外で1回（ビブリオバトル in 鳥取）実施した。

一回目：第1回ビブリオバトル@環境大

開催日時：2013年5月16日（木）4、5限目の授業時

場所：鳥取環境大学講義室

紹介者：12名の受講者（1名欠席）

参加者：紹介者12名と聴衆3名（うち学外1名）の計15名

概要：12名の紹介者からチャンプ本を選んだ。

紹介された本は、小説、エッセイ、マンガ、詩集、自己啓発本、ビジネス書であった。投票の結果、チャンプ本には2年生のIさんが紹介した「老師と少年」が選ばれた。

二回目：第2回ビブリオバトル@環境大

開催日時：2013年6月16日（木）4、5限目の授業時

場所：鳥取環境大学講義室

紹介者：12名の受講者（1名欠席）

参加者：紹介者12名と聴衆4名（うち学外1名、ただし第一回参加者とは異なる）の計16名

概要：12名の紹介者からチャンプ本を選んだ。

紹介された本は、小説、エッセイ、啓蒙書、マンガ、ビジネス書、新書であった。この回、初めて啓蒙書および新書を紹介した学生が現れた。投票の結果、チャンプ本には得票数が同数で、1年生Fさんの紹介した「夢をかなえるゾウ」、2年生Iさんの紹介した「対話篇」、2年生Lさんの紹介した「乙女の日本史」が選ばれた。Iさんは前回に引き続いてのチャンプ本獲得であった。

三回目：ビブリオバトル in 鳥取

開催日時：2013年7月21日（日）13時から16時

場所：鳥取市栄町ギャラリーそら

紹介者：13名の受講者と1名の鳥取環境大学1年生、計14名

参加者：紹介者14名と聴衆25名の計39名

14名の紹介者を3つのセッションに振り分け⁴⁾、各セッションのチャンプ本を選出した。

紹介された本は、小説、エッセイ、啓蒙書、マンガ、ビジネス書、新書、ノンフィクションであった。投票の

表1 ビブリオバトルでの紹介書籍一覧

紹介者	第1回		第2回		第3回	
	タイトル (著者)	ジャンル	タイトル (著者)	ジャンル	タイトル (著者)	ジャンル
A	そして生活はつづく (星野源)	エッセイ	宇宙授業 (中川人司)	啓蒙書	たとえば、銀河がどら焼きだったら？ 宇宙比較講座 (布施哲治)	啓蒙書
B	流星の絆 (東野圭吾)	小説	〈ほんとうの自分〉のつくり方 (榎本博明)	新書	世界最悪の鉄道旅行 ユーラシア横断 2万キロ (下川裕治)	ノンフィクション
C	空のうた (おーなり由子)	詩集	戸村飯店 青春100連発 (瀬尾まいこ)	小説	この言葉！生き方を考える50話 (森本哲郎)	新書
D	銀の匙—Silver Spoon (荒川弘)	マンガ	天使なんかじゃない (矢沢あい)	マンガ	聖・天才・羽生が恐れた男 (山本おさむ)	マンガ
E	珈琲店タレーランの事件簿 (岡崎琢磨)	小説	百姓貴族 (荒川弘)	マンガ	ヨルムンガンド (高橋慶太郎)	マンガ
F	誰からも「気がきく」と言われる 45の習慣 (能町光香)	ビジネス書	夢をかなえるゾウ (水野敬也)	ビジネス書	夢をかなえるゾウ2 (水野敬也)	ビジネス書
G	ボックス！ (百田尚樹)	小説	チーム (堂場瞬一)	小説	世界の日本人ジョーク集 (早坂隆)	新書
H	狐笛のかなた (上橋菜穂子)	小説	かあちゃん (重松清)	小説	阪急電車 (有川浩)	小説
I	老師と少年 (南直哉)	小説	対話篇 (金城一紀)	小説	チェーンボイズ (本多孝好)	小説
J	—	—	ふちなしのかがみ (辻村深月)	小説	四畳半神話大系 (森見登美彦)	小説
K	ディズニーそうじの神様が教えてくれたこと (鎌田洋)	ビジネス書	人生を変える話し方の授業 (北平純子)	ビジネス書	先生、シマリスがヘビの頭をかじっています！ (小林朋道)	エッセイ
L	ジュネラルルージュの凱旋 (海堂尊)	小説	乙女の日本史 (堀江宏樹・滝乃 みわこ)	啓蒙書	超訳百人一首うた恋。(杉田圭)	マンガ
M	プラチナデータ (東野圭吾著)	小説	—	—	東京バンドワゴン (小路幸也)	小説
N	—	—	—	—	名前探しの放課後 (辻村深月)	小説

注) 網掛けは各回におけるチャンプ本である。

4) ビブリオバトルではもともと紹介者は4から8人が望ましいとされている (谷口2012)。実際、14人の紹介を一気に聞くことや、それらを比較して投票することは聴衆 (ビブリオバトルでは観戦者という) に負担を与える。そこで4、5人のセッションを3つ設けた。各セッションで紹介された本がいずれかは、表4に示した。

結果チャンプ本には、セッション1では1年生Gさんの「世界の日本人ジョーク集」、セッション2では2年生Mさんの「東京バンドワゴン」、セッション3では2年生Jさんの「四畳半神話体系」が選ばれた。当日紹介書籍の一覧を表1に示す⁵⁾。

2-2 学生レポートの概要

学生には初回の授業時に、①これまでに読んで印象に残っている本（以下、「印象に残った本」と表記）、②今後読みたい本、③読破が難しそうなお本・今後挑戦したい本（以下、両者をまとめて「挑戦したい本」と表記）、を挙げさせた。これらの情報から学生のこれまでの読書傾向や、興味の方向性が明らかになるため、ビブリオバトルの実施結果を併せることで、ビブリオバトルの実施が読書(選書)傾向の変化にもたらす効果を明らかにできる。

学生レポートを個人別にまとめた結果を表2に示す。

2-3 質問紙調査の概要

ビブリオバトル in 鳥取（三回目のビブリオバトル）

にて一般来場者25名と、授業参加者13名に質問紙調査を実施した。質問紙の回収数は一般来場者23名、授業参加者13名であった。本稿での分析に関連する質問項目を、表3に示した。

以上の質問項目のうち、「きっかけ」「ビブリオ認知」「参加有無」「個人属性」については、紹介者として参加した学生には質問していない。学生については、これらの情報を事前に把握しているためである。

質問項目のうち、紹介者（学生）以外の回答者の属性について、集計結果を表4に示す。

集計結果を確認すると、来場者はやや女性が多い。年齢層は20代から70代以上まで幅広く、もっとも多い層は30代であった。居住地はほとんどが鳥取市内であった。一か月あたりの読書冊数は12.6冊であり、これは統計資料がないものの、3日に1冊以上と言うペースであり、おそらく平均的日本人の読書量よりもかなり多いと推察される。また、一か月の図書館来訪回数は平均4.0回であり、週1回は図書館を訪れていることになる。これについても平均的な日本人の来訪回数より多いだろう。

表2⁶⁾ 学生の読書傾向

紹介者	印象に残った本		今後読みたい本		挑戦したい本	
	タイトル (著者)	ジャンル	タイトル (著者)	ジャンル	タイトル (著者)	ジャンル
A	ネバーランド (恩田陸)	小説	純平、考え直せ (奥田英朗)	小説	眠れなくなる宇宙のはなし (佐藤勝彦)	啓蒙書
B	探偵ガリレオ (東野圭吾) 坊っちゃん (夏目漱石)	小説	流星の絆、マスカレード・ホテル、プラチナデータ (東野圭吾) 海賊とよばれた男 (百田尚樹) 植物図鑑 (有川浩)	小説	ガリレオシリーズ (東野圭吾)	小説
C	ぎぶそん、ミカ×ミカ! (伊藤たかみ)、バッテリー、The MAN-ZAI(あさのあつこ)	小説	太宰治などの日本文学作品	小説	新書	新書
D	くまのパディントン (マイケルポンド)	小説	ハリーポッターシリーズ (J・K・ローリング)	小説	見当をつけられませんでした (注: 学生の記述そのまま)	—
E	ビブリア古書堂の事件手帖(三上延)	小説	二銭銅貨 (江戸川乱歩)、シンメトリー (誉田哲也)	小説	暗夜行路 (志賀直哉)	小説
F	夢をかなえるゾウ (水野敬也)	ビジネス書	ビジネス書全般	ビジネス書	古文書など	専門書
G	芸人交換日記～イエローハーツの物語～ (鈴木おさむ)	小説	舟を編む (三浦しをん)	小説	1Q84 (村上春樹)	小説
H	永遠の0 (百田尚樹)	小説	空飛ぶ広報室 (有川浩)	小説	小説以外の本	小説以外の本
I	二十歳の原点 (高野悦子)	小説	死ぬ瞬間一死とその過程について (Elisabeth Kübler-Ross)	心理 (専門書)	罪と罰 (ドストエフスキー)	小説
J	かもめのジョナサン (リチャード・バック)	小説	京極夏彦、宮沢賢治、シェイクスピアの作品	小説 ⁷⁾	シェイクスピアの作品	戯曲
K	子どもに本を買ってあげる前に読む本 現代子どもの本事情 (赤木かんな)	児童教育 (専門書)	猫弁 天才百瀬とやっかいな依頼人たち (大山淳子)、銀河鉄道の夜 (宮沢賢治)	小説	銀河鉄道の夜 (宮沢賢治)	小説
L	図書館戦争シリーズ (有川浩)、燃えよ剣 (司馬遼太郎)	小説	色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年 (村上春樹)	小説	魍魎の匣 (京極夏彦) 人間失格 (太宰治)	小説
M	ステップファザー・ステップ (宮部みゆき)	小説	米澤穂信の作品	小説	歴史小説	小説
N	授業受講外の学生のため情報なし					

5) A から M が授業受講生であり、うち A から G は 1 年生、H から M は 2 年生である。N は授業受講外の学生であり 1 年生である。

6) 「死ぬ瞬間 (Elisabeth Kübler-Ross)」と「子どもに本を買ってあげる前に読む本 現代子どもの本事情 (赤木かんな)」が専門書であるかどうかは、判断の分かれるところだろう。一般書と専門書の中間的位置づけと考えられるが、ここでは専門書とした。

7) シェイクスピアには戯曲だけではなく詩もあるし、宮沢賢治の作品は小説(童話)以外にも詩が有名であり、俳句、短歌等もあるが、ここでは学生が戯曲もしくは小説を念頭に置いていることを考慮した。

表3 質問項目

本文での略称	質問項目	回答方法
きっかけ	ビブリオバトル in 鳥取を知ったきっかけ。	「ホームページを見て」「ポスターもしくはチラシを見て」「知人から聞いて」「その他」から選択。
ビブリオ認知	ビブリオバトルを以前から知っていたか。	「このイベントで初めて知った」「ここ半年以内に知った」「半年以上前から知っていた」から選択。
参加有無	これ以前にビブリオバトルに参加したことがあるか。	「ある」「ない」から選択。
観戦意向	今後もビブリオバトルを観戦したいか。	「観戦したい」「観戦したくない」「どちらともいえない」から選択。
書評意向	今後ビブリオバトルで実際に書評したいか。	「やってみたい」「やりたくない」「どちらともいえない」から選択。
紹介本認知	今回紹介した本のうちのどのくらい知っていたか。	「すべて知っていた」「ほとんど知っていた」「半分くらい知っていた」「ほとんど知らなかった」「全く知らなかった」から選択。
投票本 投票本の認知 チャンプ本 投票理由	セッションごとに投票した本を質問。 投票した本を知っていたか。 チャンプ本として投票した本をセッションごとに記入。 チャンプ本として投票した本は「本そのものの魅力」と「プレゼンテーションの魅力」どちらが高かったか。	「知っていた」「知らなかった」から選択。 「本そのものの魅力」「プレゼンテーションの魅力」「どちらとは区別できない」から選択。
個人属性	性別 年齢 居住地 一か月の読書冊数 一か月の図書館来訪回数 自由記述欄	「20歳未満」「20代」「30代」「40代」「50代」「60代」「70歳以上」から選択。 「鳥取市」「鳥取市外」から選択。

表4 回答者の属性

性別	男女 無回答	***** (10人) ***** (12人) * (1人)
年齢	20歳未満 20代 30代 40代 50代 60代 70歳以上	(0人) *** (4人) ***** (8人) ** (2人) *** (4人) *** (4人) * (1人)
居住地	鳥取市 鳥取市外	22人 1人
一か月の読書冊数	平均	12.6冊
一か月の図書館来訪回数	平均	4.0回

3. 結果

1-2節で示した3つの目的がどの程度達成されたのか、質問紙調査、学生レポートおよび授業中における学生への聞き取りを総合的に分析することから明らかにする。

3-1 地域における大学の知的資源供給者としての役割は達成されたか

1-2節で示した通り、大学の知的資源の供給者としての役割の達成度を、次の指標によって評価する。

- ①地域からの来場者数
- ②イベントが楽しめるものだったか（再来場の意向）
- ③既知ではない本が紹介されたか
- ④ビブリオバトルの認知度をどれだけ高められたか

(1) 地域からの来場者数

来場者数は25名であった。これは決して少ない数ではないが、多いと言える数でもなかった。しかし、会場には教員（筆者）、学生をふくめ39人が集まり、ほぼ満員となる盛況であった（写真1）。会場が満員となったことを考慮すれば、「来場者数」という観点からは、知的供給者としての役割を果たしたと言える。



写真1 「ビブリオバトル in 鳥取」会場風景

(2) イベントが楽しめるものだったか（再来場の意向）

イベントの再来場の意向について尋ねたところ（質問紙調査の「観戦意向」）、全ての回答者が、また参加したいと答えた。これは、ビブリオバトルが成功したことを意味している。一方で、実際に自分で紹介してみたいか

〔書評意向〕を尋ねると、「紹介したい」と回答したのは23人中7人（30%）にとどまった。つまり、実際に自分でやるよりも、人の紹介を見たいという需要が多い。これは大学生がビブリオバトルをおこなうことの意味を肯定的に評価することにつながる。地域住民は日常的に多忙であったり、みずから人前で書評することに心理的負担を感じていると推察されるが、大学生は単位修得という制約が存在することに加え時間的余裕がある。それゆえ大学がビブリオバトルの供給者となることは、この種のイベントに対する地域の需要を満たすものと考えられる。

(3) 既知ではない本が紹介されたか

では、このようなビブリオバトルにおいて紹介された本が、来場者にとってどのような質であったのかを検討したい。来場者がすでに読んだことのある本であったり知っている本であるよりは、未知の本のほうが知的資源の供給という意味では価値が高い。

「紹介本認知」の結果を確認すると、回答者23人中「すべて知っていた」「ほとんど知っていた」と回答した人は皆無であり、「半分くらい知っていた」が7人、「ほとんど知らなかった」が14人、「全く知らなかった」が2人であり、ビブリオバトル in 鳥取で紹介した本は地域からの来場者には馴染みの薄い本が多かったことがわかる。

しかし、来場者の一か月あたり平均読書冊数は12.6冊（表4参照）であることを考慮すると、比較的読書家が多い。つまり、これらのことから学生が読む本と来場者が読む本との間に嗜好の差が存在すると推察される。ただし、地域からの来場者の嗜好とは異なる本が紹介されていたとしても、上述の3-1(2)に示した通り、来場者は「再び観戦したい」と答えている。つまりビブリオバトルという営為そのものと、そこで紹介された本が、来場者にとっては十分な価値を有していたといえるだろう。

(4) ビブリオバトルの認知度をどれだけ高められたか

ビブリオバトルについての認知は、回答者23人のうち、「このイベントで初めて知った」人が12人、「ここ半年以内に知った」人が3人、「半年以上前から知っていた」人が8人であった。ビブリオバトル in 鳥取をとおして初めて知った人がおおよそ半数に上ることがわかる。ま

た、実際に過去にビブリオバトルに参加したことのある観戦者は3名であった。この点を鑑みると、ビブリオバトルを鳥取市でおこなったことは、この種のイベントの存在を地域に知らしめるという役割を大学が果たしたことを意味しており、目的をある程度果たしたと言ってもよいだろう。しかし、今回来場しなかった大勢の地域住民の中には、まだビブリオバトルを知らない人も多数存在するはずである。

3-2 ビブリオバトルによって得られた学修上の効果

ビブリオバトルによって得られた学習上の効果は1-2節に示したとおり、

- ①学生の読書量の変化
- ②プレゼンテーション技能の変化
- ③読書傾向の変化

と考えられる。以上の3点についてそれぞれ評価をおこなう⁸⁾。

(1) 学生の読書量の変化

学生の読書量の変化については、教員による聞き取り調査によっておこなった。結果を表5に示す。

表5から明らかなどおり、多くの学生において読書量に変化は見られなかった。ただし、読書量が増加した学生が1人いた。また、もともと多読傾向にある4人については、変化がなくとも十分な読書量を確保しているといえる。

しかし、残る8人については、ビブリオバトルが読書の機会を設けることにはなっても、読書量の増加をもたらすまでは至らなかった。

(2) プレゼンテーション技能の変化

プレゼンテーション技能の変化については、発表時の観察結果によって評価する。評価項目の一つはレジユメの有無である。第1回はレジユメを読んでプレゼンテーションを行う学生が半数程度いた。しかし、回数を重ね、第3回目である「ビブリオバトル in 鳥取」では、ほとんどの学生がメモ書きすら持たずに5分間の時間を使い切り紹介をおこなうことができるようになった。二点目は制限時間についてである。ビブリオバトルでは5分の制限時間を使い切ることが求められている。しかし制限時間通り発表することは極めて難しい。実際第1回では

8) 以降の効果は、厳密にはビブリオバトルを複数回実施したことの効果である。そのため単独回のビブリオバトルの実施で、これらの効果が生じるかどうかはわからない。ただし、ビブリオバトルは一般には継続して実施されるイベントであり、むしろその効果は複数回実施したときに生じたものを計測することが望ましいと考えられる。本稿でも、複数回実施したことによる効果を計測している。

表5 読書量の変化

学生	実施前	実施後
A	読書傾向はあり	際立った変化は確認できず
B	高校時代2冊しか本を読まず	ビブリオバトルでの紹介本3冊に加え、自発的に読書をおこなうようになった
C	読書傾向はあり	際立った変化は確認できず
D	マンガ以外読まず	努力は見られたが、マンガ以外の本を読むには至らず
E	以前から多読	多読傾向は継続
F	中学、高校時代に多読、しかし大学ではやや減少。	際立った変化は確認できず
G	読書傾向はあり	際立った変化は確認できず
H	中学時代は比較的多くの本を読む。高校時代に減少。大学入学後は読まず。	際立った変化は確認できず
I	週1冊（以前から多読）	週1冊（多読傾向は継続）
J	読書傾向はあり	際立った変化は確認できず
K	以前から多読	多読傾向は継続
L	以前から多読	多読傾向は継続
M	読書傾向はあり	際立った変化は確認できず

多くの学生が時間をオーバーしたり時間を使い切ることができなかったが、第3回では全員がほぼ制限時間どおりに発表をおこなった。これらの事例は、プレゼンテーション技能の向上を意味しているだろう。

また、学生のプレゼンテーション技能は、明確に高いものであったと考えられる。質問紙調査の自由記述欄には23人中11人が記したが、11件の記載内容のうち8件がビブリオバトルを高く評価したものであり、特にプレゼン技能を高く評価したコメントが4件であった⁹⁾。

(3) 紹介書籍の多様化

学生には授業開始時に①これまでに読んで印象に残っ

ている本（以下、「印象に残った本」と表記）、②今後読みたい本、③読破が難しそうな本・今後挑戦したい本（以下、両者をまとめて「挑戦したい本」と表記）、を挙げさせた。結果は表2にすでに示した通りである。この結果は、これまでの学生の読書傾向を示すものと考えられる。これを、ジャンルごとに集計した結果を表6に示す。

表6から明らかなおと、印象に残った本としては圧倒的に小説が多く、今後読みたい本も同様の傾向である。ただし、挑戦したい本となると啓蒙書、新書、専門書、小説以外の本、といったジャンルへと興味の対象が移っている。それでも小説が圧倒的に多い。

しかしながら、実際にビブリオバトルで紹介された本のジャンルを時系列的に確認すると（図1）、第1回こそ小説が多かったものの、その割合は回を重ねるごとに低下し、第3回には4割以下となり、ジャンルが多様化した¹⁰⁾。多様なジャンルの本を読むことが、幅広い知識を獲得することにつながることを鑑みれば、これはよい結果であった。

ビブリオバトルではチャンプ本を獲得しようというインセンティブが存在するため、なるべくほかの参加者が興味を持ちそうな本が紹介される傾向にある（谷口ら2012）ことが、学生の選書傾向を変化させたと考えられる。

実際、たとえば学生Bは今後読みたい本や挑戦したい本として「東野圭吾」の作品を挙げていたが、第1回のビブリオバトル時に多くの学生が既読であることを知り、その後、新書やノンフィクションを読み、紹介した。そのほかにも、授業時間中、チャンプ本の獲得を意識し「どんな本が強いのか」について論じていた学生も存在した。これらの事例からも、チャンプ本獲得への意欲が選書傾向を変化させた一因であることはたしかであろう。

9) 4件のコメントは以下の通りである。コメント内容は基本的には原文そのままだが、意味の取りにくい文章には若干手を入れた。

- ・皆さんしっかりお話されていて、すごいなあと感じました
- ・本の内容と語り手さん自身の思いや個性がうまく重なってとても楽しかったです。私が大学生の時は皆さんの様な表現力を持っていなかったのが感慨深いです。自分もビブリオバトル参加してみたいと思いました。次回もギャラリ-そらさんで開催してほしいです。
- ・セッション3のように、奥深さというか紹介者自身の生き方のようなものが表れていて、読み込まれている姿勢が共感でき、セッションの終わりになるにつれ参加できて良かったと感じた。
- ・最近では本当に本を読んでいないと痛感。人の前で本の魅力を伝えるという、そこまでのプロセスが素晴らしいと思うし、人間力を高める良いものだと感じました。

10) 多様化について定量的にのべるならば、HHI(Herfindahl-Hirschman Index)を用いるとよりわかりやすい。HHIは市場の集中度を測る指標として一般的には用いられるが、ここでは、特定書籍分野への集中度を計測するために用いる。HHIは各書籍分野の占有パーセンテージを二乗し足し合わせることで算出される。それゆえ、紹介書籍の分野数が多いほど、また、各分野の割合の格差が小さいほど、HHIは小さくなる。

実際に、第1回から第3回までのHHIを算出したところ第1回：0.39、第2回：0.26、第3回：0.21と推移しており、特定分野への集中度が低下している、つまり多様性が増していることがわかる。

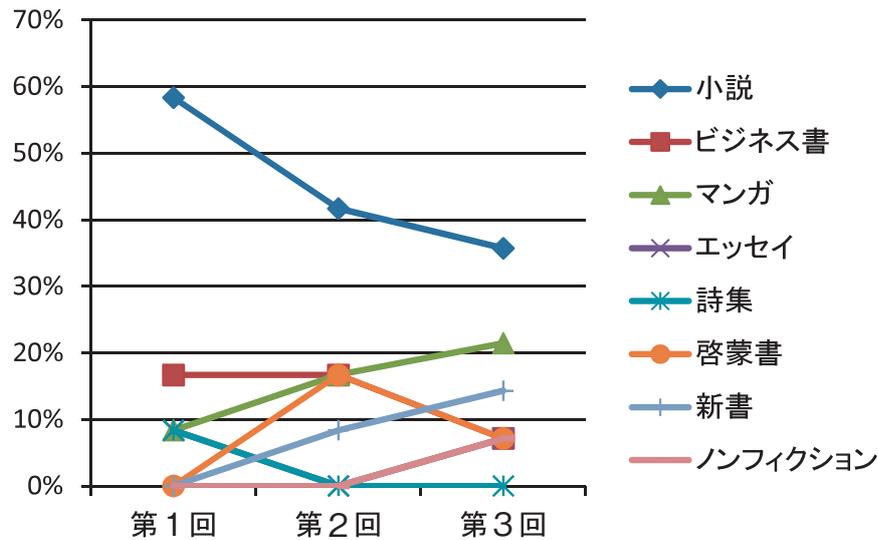


図1 ビブリオバトルで紹介された本のジャンル別時系列的変化

表6 授業開始時におけるジャンル別読書傾向

	印象に残った本	今後読みたい本	挑戦したい本
小説	11	11	8
ビジネス書	1	1	0
マンガ	0	0	0
エッセイ	0	0	0
詩集	0	0	0
啓蒙書	0	0	1
新書	0	0	1
ノンフィクション	0	0	0
専門書	1	1	1
小説以外の本	—	—	1

また、挑戦したい本として挙げたジャンルの本を実際に読んでビブリオバトルに参加した学生もいた。学生Aは宇宙に関する啓蒙書を挑戦したい本として挙げたが、第2回、第3回ともに、宇宙に関係する啓蒙書を紹介した。学生Cは高校時代新書を読んで挫折した経験から、挑戦したい本として新書を挙げたが、第3回で新書を紹介した。

このように、全体としてみると、ビブリオバトルの実施によって、紹介書籍が多様なジャンルとなることや、個々の学生レベルでは当初に表明していた目標を達成する事例も見られた。ビブリオバトルを教育現場に導入することは学生の読書体験をより豊饒なものへと変化させていると考えられる。

3-3 地域の中でビブリオバトルがおこなわれることの効果

ここでは、次の二つの効果が考えられる。

- ① 学生の意欲の変化
- ② 「チャンプ本」の選ばれ方の変化

(1) 学生の意欲の変化

ビブリオバトル in 鳥取を実施する1か月前に筆者が学生に聞き取り調査をしたところ、受講学生13名のうち、街中の会場（ギャラリーそら）にてビブリオバトルを開催することによって、学内での開催に比べて「やる気が大きく上昇した」と答えた学生は1名であり、4名の学生が「やる気が上昇した」と答えた。残る8名の学生については、学内での開催の場合と比べて特に変化はないと答えた。このことから、ビブリオバトルを学外でおこなうことは、学生の意欲の向上にある程度寄与していると考えられる¹¹⁾。

(2) 「チャンプ本」の選ばれ方の変化

表7に地域住民と紹介者の学生それぞれのチャンプ本への投票行動の結果を示した。2-3節に示した通り、質問紙では「チャンプ本」（チャンプ本としてどの本に投票したか）をたずねる項目を設けた。ただし、この項目は無記入が1~2割程度見られたため、全得票数は「地域住民の投票数」と「学生の投票数」の和に必ずしも一致していない¹²⁾。

11) ただし、それは1か月前での評価であり、実際にビブリオバトル当日の学生の表情は、いつもより生き生きとしたものであったように筆者には見えた。

投票結果を確認すると、チャンプ本として選ばれた書籍は、いずれも学生からの支持が高かったことが判明した¹³⁾。学生よりも地域住民の参加者が多かったにもかかわらず、学生の投票行動が事実上チャンプ本を決めていたといえる。

詳細に投票結果を確認する。セッション1では地域住民から最も支持を集めていた「世界最悪の鉄道旅行 ユーラシア横断2万キロ」が、学生からの支持は低かった。逆に学生から圧倒的な支持を集めていた「世界の日本人ジョーク集」は地域住民からの得票は決して多くなかった。結果として、学生からの圧倒的な支持を得て「世界の日本人ジョーク集」がチャンプ本となった。この要因としては、推測の域を出ないが、次のように考える。地域からの参加者は比較的読書家が多い。当日紹介された本については認知していなかったものが多かったとはいえ、「世界の日本人ジョーク集」は数年前のベストセ

ラー本である。学生にとっては新鮮であっても、地域住民にとってはおそらく既知の本だったのではないかと思われる。

セッション2では「東京バンドワゴン」「聖一天才・羽生が恐れた男」「この言葉!生き方を考える50話」が地域住民から票を集めた。しかしながら、このうち「この言葉!生き方を考える50話」は学生からの支持が低く、学生からの票は「東京バンドワゴン」「聖一天才・羽生が恐れた男」の2つに集中した。結果的には1票差で「東京バンドワゴン」がチャンプ本となった。このセッションでは比較的、学生・地域住民双方から票を集めた本がチャンプ本となったといえるものの、「この言葉!生き方を考える50話」の投票結果を見る限りでは、学生と地域住民との間に嗜好の差があることがわかる。

セッション3では、どの本も一般からの票を集めていたが「チェーンポイズン」と「四畳半神話大系」がやや

表7 投票結果

タイトル (著者)	ジャンル	地域住民の 投票数	学生の 投票数	全得票数 ¹⁴⁾
セッション1				
世界の日本人ジョーク集 (早坂隆)	新書	2	9	13
たとえば、銀河がどら焼きだったら? 宇宙比較講座 (布施哲治)	啓蒙書	1	0	2
阪急電車 (有川浩)	小説	4	1	5
先生、シマリスがヘビの頭をかじっています! (小林朋道)	小説	1	1	2
世界最悪の鉄道旅行 ユーラシア横断2万キロ (下川裕治)	ノンフィクション	5	0	6
セッション2				
ヨルムンガンド (高橋慶太郎)	マンガ	2	0	4
東京バンドワゴン (小路幸也)	小説	4	6	11
聖・天才・羽生が恐れた男 (山本おさむ)	マンガ	5	4	10
この言葉!生き方を考える50話 (森本哲郎)	新書	4	0	5
名前探しの放課後 (辻村深月)	小説	0	2	3
セッション3				
夢をかなえるゾウ2 (水野敬也)	ビジネス書	3	1	7
超訳百人一首うた恋 (杉田圭)	マンガ	2	3	8
チェーンポイズン (本多孝好)	小説	5	0	7
四畳半神話大系 (森見登美彦)	小説	4	7	11

注1) チャンプ本を網掛けで表示した

注2) 地域住民の投票数+学生の投票数=全得票数、が成り立っている場合、全得票数に網掛けを施した。

注3) 各セッションの投票者属性別で最も表を集めた本の得票数に下線を引いた

12) チャンプ本の投票自体は質問紙とは別の投票用紙で行っている。質問紙調査へ協力することは来場者にとっては手間であるため、質問紙と投票用紙とは分離した。しかし、実際にはほとんどの来場者(25人中23人)が質問紙への記入に協力した。

13) 過去のビブリアバトルにおいては、一部の本が大量の票を集めるということはなかった。この変化がどうして生じたのかは、今後の研究課題としたい。

14) 各セッションで全得票数を合計しても、39人とはならない。セッションを通してすべての紹介を聞いた人だけに投票権を与えたためである。

多かった。一方で、学生からは「四畳半神話大系」が圧倒的な支持を集めた。「四畳半神話大系」が学生生活を描いた内容であることが共感を集めたのかもしれない。実際、質問紙調査で「投票理由」として「本そのものの魅力とプレゼンテーションの魅力どちらが高かったか」を質問したが、「本そのものの魅力」と回答した学生は3人、「プレゼンテーションの魅力」と回答した学生は1人、「どちらとは区別できない」と回答した学生は3人で、本の持つ魅力がやや高く評価されていた。

さて、全セッションを通して明らかとなった傾向は、学生からの票が一部に集中しやすい傾向がある一方で、地域住民からの票は分散していたことである。つまり、地域からの参加者が今後増えれば、投票結果にも変化が見られると推測できる。ビブリオバトルでの選書の傾向において、チャンプ本を獲得しやすいような本を選択するインセンティブがあることは、ビブリオバトルが備えている「良書探索機能」のメカニズムからも明らかである¹⁵⁾。また、実際に今回の取り組みの中でそのようなことが生じたことは3-2(3)項に示した通りである。このことから、地域内でビブリオバトルを継続的に実施するとなれば、学生の選書傾向に一層の変化が生じることになるだろう。

4. おわりに

本稿では、昨今大学と地域との連携（域学連携）が求められる中で、ビブリオバトルを地域の中で実践したことにより得られた3つの効果について検討をおこなった。その結果(1)「地域における大学の知的資源供給者としての役割」は4つの評価項目（「地域からの来場者数」「イベントが楽しめるものだったか(再来場の意向)」「既知ではない本が紹介されたか」「ビブリオバトルの認知度をどれだけ高められたか」）すべてにおいて十分な成果が達成されていた。(2)「ビブリオバトルによって得られた学修上の効果（学生自身の学修効果）」は3つの評価項目のうち「読書量の変化」においてはそれほど大きな成果を確認できなかった。しかし残る2つの評価項目（「プレゼンテーション技能の変化」「紹介書籍の多様化」）では十分な成果を確認した。3つの効果を総合すると、全体的にはおおむね成果があったといえるだろう。(3)「ビブリオバトルが地域の中でおこなわれることの効果」は2つの評価項目のうち「学生の意欲の変化」でやや効果が見られたものの、「チャンプ本の選ばれ方」には当日の学生の投票動向の大きな変化もあり（前述の脚注12参

照）、地域住民が加わったことの効果は結果的には打ち消されていた。ただし、地域住民が投票に加わったことで、新たな評価を得た本が生まれ、これは学生のやる気を引き出すうえで大きな成果であったと言えるだろう。2つの効果を総合的に考えると(3)については、やや成果があったといえる。

以上(1)から(3)の成果を総合的に判断すると、ビブリオバトルを地域で実践することには意義があると考えられる。そして、このイベントは低年次の学生にも十分実施が可能であり、学生が知的資源の供給者として地域のなかで活動することとを可能とする。今後も継続的にビブリオバトルを地域で実践することが重要であろう。

最後に本稿に残された課題について述べたい。本稿において得られた結論は、一般化するには尚早な段階にある。受講学生数に限りがあるためサンプルが小さいという問題がある。今後ビブリオバトルを繰り返し実施してゆく中で、本稿で得られた結果をさらに検証したい。

謝辞

ビブリオバトル in 鳥取にご来場いただいた皆様にお礼申し上げます。また、ポスター設置にご協力くださった鳥取市内の事業者各位に感謝いたします。ビブリオバトル in 鳥取当日の写真は「ギャラリーそら」からご提供いただきました。本稿はビブリオバトル in 鳥取へ参加した学生の存在なしには成り立たなかった。彼らに感謝したい。

また匿名の査読者二名からのコメントがきわめて有益であった。

参考文献

- 1) 総務省 (2012) 『「域学連携」地域づくり活動』HP (URL: 2013年8月26現在)
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html
- 2) 高木悠哉、松岡律、熊田岐子、住本克彦、筒井愛知 (2012) 「大学教育への導入に読書を用いることの有効性に関する試験的検討」『環太平洋大学紀要』5、pp. 69-77
- 3) 谷口忠大、川上浩司、片井修 (2010) 「ビブリオバトル：書評により媒介される社会的相互作用場の設計」『ヒューマンインタフェース学会論文誌』12(4)、pp. 427-437
- 4) 谷口忠大、須藤秀紹 (2011) 「コミュニケーション

15) この機能について詳しくは谷口ら (2010) を参照のこと。

- のメカニズムデザイン：ビブリオバトルと発話権取引を事例として」『システム／制御／情報：システム制御情報学会誌』55(8)、pp. 339-344
- 5) 谷口忠大 (2012) 「書評を媒介としたコミュニティデザイン：ビブリオバトルの実践」『計測と制御』51(8)、pp. 726-731
- 6) 谷口忠大 (2013) 『ビブリオバトル』文春新書
- 7) 嶺崎寛子 (2013) 『「リベラル・アーツ型教育の展開」シンポジウム報告:「多文化リテラシー」から考える』『教養と教育』12、pp. 41-45
- (受付日2013年8月26日 受理日2013年10月30日)